カトリック高松教区報

２０２１年3月14日（第２００号）
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074　高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区:catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成:yousei@takamatsu.catholic.jp
WEB　http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

マザー・テレサの言葉

単にほほえむだけで、どれほどたくさんの善をもたらすことができるのか、わたしたちは、決して知ることができないでしょう。ほほえみは、人にやさしくふれるようなものです。わたしたちの命の中へ、神様の真(まこと)のひとひらを運んできてくれるものです。

教区報２００号発行

創刊から５１年
教区の歩みを記録

高松教区報は創刊２００号を迎えました。

教区信徒の皆様、そしてこれまでに携わってくださったすべての方々に御礼申し上げます。

教区報は１９７０年に「四国信徒だより」として創刊され、当初年４回発行されました。１９９５年82号で名称を「高松教区報」と変え、２００２年に１００号を発行しました。２００５年からは年６回奇数月の発行となり、創刊から51年あまりの歴史を刻みました。

この間１９９７年頃からは、編集作業を教区事務所のパソコンにより自前で行うようになりました。体裁もＢ５版、Ａ４版の白黒印刷でしたが２００９年１２７号からＡ３版カラー印刷となり、２０１９年から再び白黒印刷となりました（インターネット版はカラー）。

教区報は教区の歩みの記録、歴史そのものです。様々な行事や活動をたくさん紹介して、教会の姿をお伝えしていきたいと思っています。各教会活動団体、また、個人の活動でも情報をお寄せくだされば幸いです。皆様のご協力をお願いいたします。（教区広報）

前教区広報委員長の谷口広海助祭から寄稿していただきました。

教区広報にたずさわって

高松教区助祭　谷口広海

教区報第２００記念号発刊を心よりお祝い申し上げます。

高松教区報をここまで途切れさせることなく続けることが出来ましたのはひとえに、投稿あるいは経済的援助、そして、ひたむきに継続を後押ししてくださった方々のご協力の賜物であると、感謝を申し上げたいと思います。

思えば教区広報担当と教区報発刊の任を命じられましたのは12年前の２００８年のことでした。当時、教区終身助祭候補として高松教区に身を置いたばかりで、どういう役職が与えられるのか全く想像もつかなかった私に、触ったこともないパソコンツールによる仕事が与えられ、まさに青天の霹靂とはこういうことだと不安のどん底にいたことを思い出します。

幸いにも、当時はしっかりと組織された「教区広報委員会」が十分に機能していて、何の経験もない私でも、多くのスタッフの助力により、多くの経験を積む時間が与えられました。まさに神様の御手の中にあったとの確信を疑う余地はありません。教区報担当者として携わり始めた１２７号から、退任までの66号にも及ぶ発行回数における紆余曲折の中、四国全域の信徒の皆様による多くの善意と励まし、ご協力に対しまして心から感謝申し上げ、今後の教区広報と教区の更なる発展を心よりご祈念申し上げます。

最期にこの４月から、私議、長崎教区への転籍にあたり、これまで高松教区司祭、助祭団の中に受け入れて頂き、また教区助祭職への多くのご協力とご理解を賜りました高松教区の皆様に、心からの感謝を申し上げます。

(1) 第1号　四国信徒だより　45.1.1

四国信徒だより

創刊にあたって

現代の社会にあって信徒からの使命を自覚し、キリスト教的な態度をもって「造り直し」としての切をすることが知何に重要であるかは周知のとおりであります。

本協議会は、善き協づくりに進われ、本来の使徒活動が出発であり、今後に具体的、実践的向づけを検討してまりたいと考えております。

ここにおいて、かねてより要請されていた広期による使徒職実践を目ざすために、この度「四国信徒だより」を創刊する運びとなりました。

本紙はささやかなものですが、教区協議会の活動状況は勿論のこと各々教区および各信徒団体会の活動報を通して、信徒相互の連帯感を高め、もって四国信徒の使命感を高めるべく、ますます充実するよう努めたいと思います。

人生は始まりの連続

70年へのびる四国の信徒

†教区信徒使徒職協議会開かる†

昭和45年1月1日付創刊号

「主の栄光」を表すために協力し合おう

キリスト教一致祈祷週間におもうこと

使徒ヨハネ　諏訪榮治郎

第二バチカン公会議はキリスト教諸教会一致のため、互いの対話を勧めてきました。今年も１月18日～25日に一致祈祷集会が持たれる予定でしたが、コロナ感染防止のため、招きあう集会ではなく各教会ごとの単独集会が持たれました。テーマは「私の愛にとどまりなさい。」（ヨハネ15章５節）でしたが、合わせて第一コリント書１章10～も読まれました。そこにはコリントの教会の派閥争いがパウロによって叱責されています。『私はパウロにつく、わたしはペトロに、・・・』と言い争っているとは何事か。」初代教会にもすでに分裂があったとは驚きです。

２０００年に及ぶ教会の歴史は確かに「改革の歴史」でした。それぞれにキリストのみ言葉にふれ、主に愛された喜び、自分に死んでキリストに生きたい・・その思いの中で洗礼を授かったのです。これらの霊的な恵みの体験ゆえに、もっとキリストの教会でありたい・・キリストの恵みをもっと強調したい・・主義主張のもと・・時に政治が絡み・・それぞれのキリスト教教派がうまれ、その中にさらに様々なセクトが生じ、改革・・改革・・キリスト教会が今やどのくらい枝分かれしているのかわからないほどです。キリストのブドウの木が無数に枝分かれして今日に至っています。しかし今思うことは、互いに排斥しあうのではなく、「わたしはあなたを愛した」という私たち一人一人が主に愛されている存在である事実を冷静に受け止めたとき、互いに尊敬し、この社会で「主の栄光」を表すために協力し合うことが大切ではないでしょうか。それぞれの霊的体験から生まれたキリスト教会が「組織」として統合一致するのは困難でしょう。むしろ「すべての命を大切にするため」の奉仕者（宣教者）として協力し合うことが一致となることではないでしょうか。

はばたき

ＮＨＫスペシャルで放送された「２０３０未来への分岐点」を見た。

番組の冒頭、20年～70年後の未来からこんなメッセージが届く…「２０３０年までの10年が地球と人類の未来を決める」…描かれる未来の東京は絶対にこんな未来にしてはいけないと思わせるひどい有様だ。番組では、これからの10年で私たちが何をするべきかを考えていく。

３回の放送で取り上げられたテーマは「温暖化」「食糧不足」「プラスチック汚染」。私たちの多くが、対策を講じなければならないと知っていることがらである。未来からのメッセージは「２０２１年には科学者が警告したり、世界のリーダーが話し合っていたはずなのに、君たちは何も対策を講じなかった」と責める。そして私たちに与えられた時間が10年だというのである。

最新の研究の結果は悪い話ばかりで落ち込むが、あちこちで行われている活動、特に若者の姿には勇気づけられる。マイボトルやマイストローなど環境に配慮した生活が当たり前だという若者、レジ袋の廃止を世界中に呼びかける若者。そして若者は現在の状況を生み出した「大人」に怒りさえ感じているようだ。それはまさに「大人」にあたる私にはドキッとする瞬間であった。

我が子が生きる未来の世界をひどい有様にするわけにはいかない。私のやるべきことに、少しずつでもしっかりと取り組んでいこう。

パスクアル神父から近況報告

未来の教会の土台を作る時代

前本部事務局長・丸亀教会主任のパスクアル神父から1月8日に近況報告が届きました。

みなさん、こんにちは。まず、ちょっと遅いけど、明けましておめでとうございます。長く連絡しないで、本当に恥ずかしいです。ごめんなさい。年賀状も書かないで、この冬は変なクリスマスを過ごしました。

スペインもコロナの感染は広がっていますが、今までは、お陰様で、私も父母も元気です。母は10月にころんでしまい、腕を骨折しました。年を取っているので入院し手術も必要でした。私は長男として側にいなければなりませんでした（スペインの習慣ですが、患者が入院する時には一人ではなく、側で世話をする家族の誰か一人が必要です）。久しぶり夜の病院の雰囲気を味わい、隣のお祖母ちゃんの苦しみを見て、かわいそうにと思っていました。母もよくない夜を過ごして幻覚があり、私を見ても名前が分からなかった～。年寄りは家から離れると大変らしい。でもおかげさまで、コロナの感染の第二番目の波なのに、母も私も感染しないで（病院は一番危ない場所です）、今もまだリハビリに行っていますが、回復してきました。安心しました。

父はもうすぐ83歳、歩くことはだんだん難しくなっています。でも、毎日車で畑に行っているので、元気です。畑を辞めたら、父は必ず天国に行くと思う。田舎の人は自然を触らない時には、すぐ天国に呼ばれると思う。

それ以外のことでは、甥と姪は私の喜びです。父と母も、孫と会うことがとても楽しいです。また、弟や義理の姉妹と会うことも楽しいです。久しぶりの家族再会のために感謝します。父母がいつまでそばにいて下さるのか分かりませんが、私は、今、二人の世話をしなければならないことを感じます。

でも、**日本のことを思い出したり考えたりしないい日がありません。**例えば、昨日の朝早く、司祭館から出ると、二人のお爺ちゃんは広場で立って朝の挨拶をしてくれた。私は答える時、日本語で「おはよう」と言ってしまった！二人の驚きの目を見て、すぐ分かりました。「ああ！スペインにいる」と。また、時々、朝に起きると、丸亀に住んでいると考えています。マスター（修士課程）の卒業の後、日本に戻っても長くは日本におれないことを知ってたけど、その三年間は素晴らしかった。四国の生活にすぐ慣れて、たくさんの友人が出来て、とてもよかったと思います。日本に戻ったら、必ず四国に戻りたいと思います。母は日本の話を聞きたくないです。聞くと、すぐ怒ってしまう。ジェラシー（嫉妬）があると思う。

私は先週に53歳になりました。新しい教会とスペインの刑務所に慣れて、楽しい生活をしていますが、先のことはあまり考えていません。どうして司教さまが田舎の二つの小さい教会に私を送って下さったことか分かりません。でも感謝します。**ここでは大きな町と比べたらとても楽しい人生を送ることが出来ると思います。**四国と同じように、田舎はどんな国でもその国の魂だと思います。まだまだ自然の生活を味わうことが出来ますし、よかったと思います。今、スマホやパソコンなどのメディアをあまり使わないで直接に村人と繋がることができ、一番大好きなことです。これこそ、私のメディアです。いつか、日本の人にもこの雰囲気を見せたいと思います。

司牧の状況は大変です。高松教区だけの問題ではなく、全世界的に大きな試練に直面しています。時代は変わってきたと思います。戦争よりはこの危機の方がいいと思いますが、長く続くので、亡くなった人だけの問題ではなく、精神的に悩んでいる人も大きな問題だと思います。引きこもっている司祭の人数も増えていますし、また、大きな教区でも停滞しがちで、だんだん人々が信仰から離れているようにも見えます。本当に恐ろしい時です。もちろん、小さい教区と小教区は一番危ないと思います。ですから、高松教区の皆さんの心配はよく分かります。私も同じです。

でも、**この危機の中で、神様のメッセージ、神の言葉は何でしょうか？**この今の時を通して、神様は私たちに何を伝えたい？私たちは深く考えなければなりません。過去の時代とともに、過去の教会は無くなっていくと思います。急に起こったことではないが、もう二度と、私たちの知っていた教会の姿や組織に作り直すことはできないでしょう。ですから、**未来の教会の土台を作る時代だと思います。**しかし、これに気付いてない人も多いので、私は自分がそれを考え深めるために、神さまから小さい教会に送られたのかと考えています。これも、神様のしるしだと思っています。馬小屋も十字架も小さい場所でしたが、神様はその場所から、私たちを救いました。ですから、希望があります。

今年の夏にバカンスが出来たら、必ず高松教区に戻りたい。せめて一年に一か月行けたらよいのにと思います。この繋がりを持ち続けたら、お互いに助け合うことが出来ると思います。会えたら、またゆっくり考えましょう。その時まで、すべてを神様にお任せしましょう。

恐れないで。イエス様は私たちとともに、この世の終わりまでおられるから。聖霊の導きを願いながら、頑張りましょう。**私の心にみんながいます。そして、みんなのために毎日祈っています。**

どうぞお元気で、ワクチンを受ける時まで、待つ間は気を付けましょう！では、また。

（写真の説明）
写真のマリア様はアリッサカ（ARRIXACA）の聖母です。この聖母の御像は、中世に畑の灌漑用水路の中に見つけられた聖像です。おそらくイスラム教徒のスペイン侵入の時に、信者たちによって隠された像だったのでしょう。ムルシア市（私の地方、ムルシア州の首都）の保護者です。病気の人を癒す聖像と思われていて、一番いい病院の名前でもあります。

アリッサカ会のメンバーは、コロナの患者さんを癒すために、またこの問題の終結のために、各小教区に聖像を巡り送りました。私も三つの教会まで聖像を運んで、一日の祈りをしました。たくさんの慰めを受けました。しかし、神様の恵みは自然の法則を滅ぼさないので感染が広がってしまって、今日も三番目のコロナウイルスでの葬儀があります。特に今年は、感染の初めから一番大変です。この状況で私は家族の近くにおれて良かったと思います。

いのり

故奥村一郎師が作られた「そのままに」です。私は座右の銘として祈っています。

「何も考えないで、何も思わないで、ただそのままに生きたい。悲しいことも、楽しいことも、淋しいことも、つらいことも、あるけれど、悲しみは悲しみのままに、楽しみは楽しみのままに、そのままに生きたい。この地上のことは、みんな、いつかは消えて行く。万物流転、嫌なことも、楽しいことも。小鳥が小枝で、虫が草むらで鳴くように、そのままに生きたい。あまりに窮屈なことをいわないであまり自分の好みを人に押し付けないで、みんなと、そのままに自由な空気を吸って生きたい。神様は、何一つも同じ素質を同じようにお与えにはならなかったのだから、小さいものは小さいなりに、大きいものは大きいなり、そのまま、与えられたそのままを、恥ずかしがることも、恐れることもない。そのままうけて、主を讃えよう。狭い心にならないように。間違えたって、いいじゃないか。間違いも、そのまま受け取れば、少しは謙虚の薬になる。神さまは、私たちが、失敗することを責められない。そうしたことにこだわって、いらいらしたり、むやみに、自分をいじめることを、嫌われる。何も考えないで、何も気にしないで、そのままに、うけて生きよう。」

諏訪榮治郎司教

（聖母訪問修道女会の「訪れ・いのり」よりの抜粋です）

地区・ブロックの話題

～愛媛地区～

聖カタリナ大学アルベルト・カルペンティール宗教画ギャラリーと宇和島教会

聖カタリナ大学構内には、ドミニコ修道会アルベルト・カルペンティール師の宗教画ギャラリーがある。訪れた方も多いことだろう。聖カタリナ大学のホームページには、詳細が公開されている。このギャラリーは、２００８年に開館したアルベルト・カルペンティール師（ベルギー）個人の作品を展示するギャラリーであり、ステンドグラスや砥部焼、版画などの展示館の他に、新たに油絵の展示館が開館した。

カルペンティール師は１９３７年に聖ドミニコ修道会に入会、１９４９年に宣教師として来日し、東京芸術大学で日本画を学んだ。１９５８年に帰国後は、郷里ベルギーアントワープ国立美術学校でステンドグラス制作を学んだ。その後、東京都に在住して創作活動を行い、これまでに日本、ベルギー、オランダ、カナダ、アメリカなど世界各国で個展を開いた。キリストの生涯や黙示録などをテーマに描いた宗教画は内外の高い評価を受けた。師は、２０１４年母国ベルギーに帰国した。２０１６年、米国セントルイス大学アクイナス神学研究所（ドミニコ会）より、ドミニコ会８００年記念の年にあたって、学位記（名誉博士号）を授与された。

２０２０年カルペンティール師は、１０１歳の生涯をとじ、その膨大な美術遺産は、聖カタリナ大学の建学の精神に基づいて、学生への宗教的な教育に役立てるために、聖カタリナ大学のギャラリーで管理している。聖カタリナ大学は、愛媛県で４つめの看護学科を２０１７年に開設し、今年のＣｏｖｉｄ－19のパンデミック下において、看護師養成の重要性が一層、増しており、聖カタリナ学園の貢献が期待される。

実は、ホームページには紹介されていないが、カルペンティール師は２０２１年に創立１００周年を迎える愛媛地区南予ブロック宇和島教会とは、とても深い関係がある。下の写真は、１９９８年に改築された現宇和島教会聖堂内部正面である。一般の聖堂にみられる正面十字架の位置に、カルペンティール師が、復活されたキリスト像を描いている。祭壇中央壁面に十字架があるかないかについての意見は緒論あると思われるが、同教会では、祭壇に十字架を掲示する習慣である。宇和島教会の人々は、この貴重な絵画を大切にし、その独自の聖書の詩的世界に親しんでいる。宇和島教会１００周年の記念に同教会巡礼をおすすめしたい。

ホビノ・サンミゲル聖カタリナ大学学長

ギャラリー入り口（上）
ステンドグラスと版画（下）

宇和島教会内部正面（左）描かれている「復活されたキリスト像」（右）

八幡浜教会のステンドグラス

２０２０年５月３０日に再建した八幡浜教会の正面十字架の上段には、新しいシンボルとなるステンドグラスが作成された。制作者は、東京の「璃房ステンドグラス五味理氏」である。会社ＨＰにも施工例として掲載されている。十字架がアレンジされているのが確認されるだろうか。
(https://e-ribo.com/enforcement/enforcement_cases/public/)

教区広報から

教区広報委員会では、教区報・インターネットで教区内小教区の情報を幅広くお伝えしていきたいので、皆様からの情報提供をお待ちしています。小教区の広報誌・新聞などに掲載された記事も歓迎です。各地区の広報委員を通して又は教区広報に直接、ニュースをお寄せください。

光は闇の中で輝いている

光を探すよりも、光になりなさい

「夜の長さにうずくまり、いらだって夜明けを待つ・・」ヨブの言葉です（７・４）。なぜこんなことが起きるのですか？コロナ感染防止のために営業を制限され、お世話になっていた店も閉店に追いやられ、わたしはホームレスになりました。昨夜の報道番組からです。思い出すのは「阪神淡路大震災」（１９９５年１月17日）のことです。家を失った人々は、学校の体育館、公民館、お寺や教会に身を寄せた。当時「思いやり」が町のルールとなったのです。自分を忘れて周りの人のことを気遣ったのです。「ボランティア元年」と呼ばれ、多くの若者が現地救援本部（被災した教会）に集まり、目まぐるしい救援活動をしたのです。その中で、次第に見えてきたことは、その地に住所を登録していないホームレスの方々は、避難所を追い出されたのです。また日本国の滞在期間が切れた（オーバーステイ）の外国人は、公的援助保護の対象ではなかったのです。また身動きの取れず、情報も入らない「独居老人」があちこちに見つかりました。

いま感染への恐れから距離を置く「ソーシャルディスタンス」が求められています。夜回りで出会ったホームレスのおじさんが、何とか役所とかけ合い「生活保護」を受け、アパートに入ることができました。「よかったね。これから自立できるね。自炊も頑張るんだよ。」喜んだのですが、２～３週間経ったある日、彼は元のホームレスの場に帰っていました。彼が必要だったのはアパートではなく、仲間だったのです。つまり彼にとって自立することは社会的な孤立となったのです。誰かが必要だったのです。

いま「不要不急」が求められています。必要のないことはしない・・、急ぐことがないことはしない・・何が必要なことか、何が急いでやるべきことかを識別する心が必要です。早く闇が終息し、光が輝いてほしい。誰しも祈り望んでいることです。しかしヨハネ福音書は「光は闇の中で輝いている」（１・５）というのです。暗闇は私たちを包み込んでいますが、その闇の中に光が輝く、というのです。

大戦中、ポーランドのアウシュビッツでの聖マキシミリアノ・コルベ神父を思い出します。またある捕虜収容所では、人間であることを忘れ動物のように奪い合った兵士たちが、一人の兵士の捨て身の愛を見て我に返り、仲間の一人一人を気遣って生きてきた部隊があったことが語られています。実に復活されたイエスキリストは遠い昔の人ではなく、私たちの一人だったことに気付いたとあります。このコロナという闇の中、光を探すよりも、光になりなさい。「あなたもその人の隣人になりなさい」（ルカ10章）。教会の設備（部屋）はいくつも空いています。空いた部屋をどう使うのでしょうか？集まってはいけないといわれているのですが・・。

諏訪榮治郎司教

宇和島教会100周年続報

100周年を迎えた宇和島教会

アウグスチヌス　堀内伊作

高松番町教会と私たち宇和島教会は、本2021年に創立100周年を迎えました。

明治以降、南予（愛媛県南部）宇和島の地にパリー外国宣教会によって初めて福音宣教の種が蒔かれたのは1891年でありました。その後四国の宣教を委ねられた聖ドミニコ修道会は、教会の現在地にあった2階建て家屋を購入し、聖ドミニコ小聖堂と名付け、ミサが行われるようになりました。そして1921年、聖ドミニコの帰天700年の記念行事の一環としてドミニコ会により最初の教会堂が建てられました。初代主任イシドロ・アダネス神父様は、この教会建設と1928年の愛和聖母幼稚園（四国で2番目のカトリック系幼稚園）設立に力を尽くされました。イシドロ神父様は1954年まで宇和島で宣教を続け、以来12名の神父様が宇和島教会に着任されました。初代イシドロ神父様から武田神父様、モデスト神父様、マテオ神父様、アドリアン神父様、アンドレス神父様、マテオ神父様（再任）、アルバロ神父様、ラファエル神父様、イグナシオ神父様、ホルヘ神父様、田中正史神父様、ヨセフ呉神父様、そして現在の申繁時神父様であります。神父様お一人お一人は、幼き日のイエス様との出会いと福音宣教のために文字通り身を捧げて下さいました。

教会100年の歩みとこれら神父様方の献身的な働き、信徒の結束と教会をまもり導いて下さった神様への感謝を込めて、宇和島教会信徒の延永さんが『宇和島教会創立100周年の祈り』を編み、諏訪司教様のご認可を戴きました。私たちはミサの度にこの祈りを唱え、2021年11月20日（土）午前10時から諏訪司教様をお迎えして行われる100周年記念ミサに向け心を整えてまいりたいと思います。

宇和島教会創立100周年の祈り

「全ての人々をいつくしまれる父なる神よ、今（こ）の宇和島の地を祝福して下さり、あなたのお計らいによって、真（まこと）の命の言葉である福音をもたらして下さったことを感謝します。

あなたの召命によって福音宣教のため今（こ）の地に身を捧げて下さった宣教師の方々の意思を受け継ぎ百周年を迎えることになった今日（こんにち）福音宣教のために身を投じる人を今度は送り出すことが出来る召命の泉を与えて下さい。

あなたの恵みに支えられて豊かに導かれますように。

主キリストによって、アーメン。」

諏訪榮治郎司教　認可2020年11月

Prayer for the Centennial Celebration of Uwajima Catholic Church

" God the Father who cares for all people,
We thank you for blessing the land of Uwajima,
for bringing us the Gospel, the true Word of life according to your will.

Today, as we celebrate the centenary of our Church, we want to succeed in passing on the will of the Missionaries who dedicated their lives to evangelize this land.

If it is your will, give us more vocation, men & women who will dedicate themselves for evangelization.

May you support us by your abundant grace and guidance, through Christ our Lord. Amen "

Bishop Apostle John, Eijiro Suwa admitted November, 2020

◇教区スケジュール◇

3月
- 5日（金）性虐待被害者のための祈りと償いの日
- 7日（日）四旬節第3主日
- 9日（火）司祭評議会　Zoom会議
- 14日（日）四旬節第4主日
- 17日（水）日本の信徒発見の聖母
- 19日（金）聖ヨセフ
- 20日（土）春分の日
- 21日（日）四旬節第5主日
- 24日（水）経済問題評議会
- 25日（木）責任役員会　Zoom会議
- 25日（木）神のお告げ
- 28日（日）受難の主日（枝の主日）聖週間

4月
- 1日（木）聖木曜日（主の晩さん）
- 2日（金）聖金曜日（主の受難）（大斎・小斎）
- 3日（土）聖土曜日
- 4日（日）復活の主日
- 11日（日）復活節第2主日（神のいつくしみの主日）
- 18日（日）復活節第3主日
- 25日（日）復活節第4主日
- 29日（木）聖カタリナ（シエナ）おとめ教会博士 昭和の日

子どもと女性をまもる委員会

聖職者による性的虐待

相談窓口

電話番号：087-831-6659

相談窓口受付時間
月曜日から金曜日（祝日除く）
午前９時～午後５時

高松教区対応チーム

（番町教会の祈りもご紹介します。）

高松番町教会創立百周年の祈り

いつくしみ深い神様、高松番町教会創立百周年を迎えるにあたり、心から賛美と感謝の祈りを捧げます。

世界は百年の長い歴史の間に、悲惨な世界大戦や種々の困難を乗り越えて、あらゆる命を大切にすることの尊さを学びました。現代の教会は第二バチカン公会議によって新しい風が吹き込まれ、世にあって教会の本来の召命と使命に気付き、キリストのいのちの喜びを力強く生きるものとなりました。教会にとって何が大切なのかを、言葉と行いによって証してくださった信仰の先輩方に心から感謝いたします。

創立百周年記念を機に、新たにされて祈ります。

主よ、百年前に香川県の最初の宣教の場として、あなたは高松番町教会をお建てになりました。時代とともに取り巻く社会や教会環境の変化はあっても、主が言われた「あなたもわたしのぶどう園に行って働きなさい」の言葉は永遠に変わることがありません。高松番町教会の神の民一人一人が、キリストに結ばれた者として、地域社会の中で平和の道具として働く奉仕職の上に、豊かな聖霊の導きと照らしを祈り求めます。

私たちの主イエス・キリストによって、アーメン。

諏訪榮治郎司教認可　2020年10月

いのちの電話

時刻は深夜の2時過ぎ。長い電話相談が終わって、またベルが鳴った。「はい『いのちの電話』です」。

「あの…」の一言で沈黙が続き、ため息が伝わる。やがて「つらくて、もう死にたい…」と涙声で再び長い沈黙。家庭問題を抱えた50代の女性と思われる。

「死にたいほどつらい気持ちを聞かせて下さい」と伝え、途中で切られないように気を配る。…70分に及ぶ傾聴で、どうにか気持ちを取り戻した様子。「また掛けます」の声を聴き、ほっとした（…26年前・筆者の記憶から）。

どこの誰かも分らない。電話を通じ孤独の苦しみや悩みを聴き、生きる力を分かち合う「いのちの電話」が日本で始まって50年。高松教区内でも四県で活動している。相談ボランティアはカトリック信者を含め約280人を数える。高知では熱心だった故シモンズ神父さんが独自の相談活動から「いのちの電話」への移行に尽力された功績は大きい。

警察庁の自殺統計によると、全国で昨年の自殺者は11年ぶりに前年を上回り2万1077人。女性は過去5年間で最高となり、小中高生は統計がある1980年以降で最多となった。

教区内でも増加の傾向で、専門家は「長期化したコロナ禍による生活変化の影響が大きい」と分析する。一層の包括的な支援で尊い命を守らねばならない。（M）